NO9 2009.7

棚田通信

NPO法人 恵那市坂折棚田保存会

なごみの里だより

里山と坂折棚田

今年の１月６日付けの朝日新聞で「にほんの里１００選」が発表されました。これは朝日新聞創刊１３０周年と、森林文化協会創立３０周年を記念として行われたもので、健やかで美しい里を全国から１００ヵ所選ばれています。さて、「里」の定義は、人と土地、自然のかかわり、人の暮らし、土地や自然とかかわる生業や活動、それらが過去から継続され、将来にわたって持続されることの観点から次のように定義されています。

「集落と、その周辺の農地や草地、海辺や水辺（湿地、川、池、沼）里山などの自然からなる地域。広さにかかわらず、人の営みがつくった景観がひとまとまりになった地域」

当坂折棚田と里山との関連について考えてみますと、棚田の周辺に広がる山林は、里山の風景と考えるには少し違和感があります。黒緑色の山林地帯として棚田にせまって来ているという感じで、何にか重苦しさを思わせます。この地域の将来の姿としてこれでよいだろうか否（いや）、もっと明るく、豊かさを感ずる景観にしていく必要があると思います。そこには、地域に暮らす人達はもちろん、多くの国民の皆様の深いご理解と協力が必要です。４００年の歴史を持つ坂折棚田の景観維持を考えるとき、極めて重要なことは、周辺の林地との関連を改善していかねばなりません。石を積み上げて造成された棚田は長年にわたって、水稲が栽培されて来ました。その水稲は、周辺の山草（シバ）を、肥料として土づくりのために刈り取り、棚田に投入され続けてきました。その結果今日の肥沃な棚田となっており、美しい石積みの棚田で穫れる米は美味しいのです。しかし１９４０～５０年代には、植林が盛んに行われ、今日の景観となっているのです。今から半世紀前の坂折棚田の周辺は、草刈り場となっていたため、落葉樹の小さい木（シバ）やススキ、カリヤス、などで覆われていて、太陽光もよく入り明るくて、四季折々の景観が見られたことだと思います。すなわち里山の定義にふさわしい、暮らしがなされていたと思われます。今後の坂折棚田の保全、伝承を考えるとき、周辺の山地の改善も視野に入れていかねばならないと考えます。どうか皆様のご意見、協力をお願いする次第です。

（田口　記・phot by 伊藤憲男）

※㈶森林文化協会発行・朝日新聞社発売の『生物多様性の日本を参照しました。

楽しかった棚田オーナーの田植

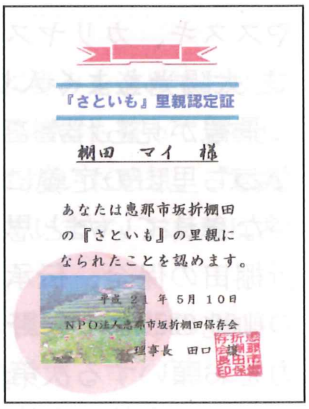
去る６月６日（土）、第４回坂折棚田オーナーの田植えが行われました。平成１８年に始まったオーナー制度は、当初７組で行われ、３０組、３２組、今年（４回目）は５０組のオーナーの方々に参加していただきました。当日は、天候が心配されましたが、薄日のさす、いわば田植日よりとなり、午前１０時に坂折棚田屋敷に集合、ＡからＧまでのグループに別れ、保存会員のうち田んぼ提供者がグループの主任となって、現地案内と田植えの実技指導のもとに、オーナーの持ち田（約１アール）に苗を植付けしていただいた。すでに経験された方が多かったので、植付けも前年よりは格段に上手に行われていた。田植え作業は、ほとんど午前中で終わったところが多かった。

オーナーの皆さんの感想を聞いたところ、「大変楽しかった」「気持ちよくやれた」「次の草取りが楽しみだ」などの意見が出された。５０組（約１５０人）は多いので、スムーズに田植えができるか心配をしていたが、グループ別けによって、何等問題なく終ることができ、スタッフ一同安心しました。

はじめての試み「さといも里親オーナー」

ことし「さといも里親」オーナーを募集したところ１０名の応募があった。去る５月１１日（月）～１７日（日）に里芋の植付を行った。１人１０株～１５株の植付、植付そのものは容易に行うことができ、あっという間に終了した。参加オーナーは、大変景観のよい棚田で「さといも」の植付けができ、秋の掘り取りが楽しみだと話していた。今後、２回程度の土寄せを行い「さといも」の育つのを見守ることになっています。

なお、将来オーナー募集を予定しているのは『くり』、『野菜』、『りんご』『耕廃水田復旧』などです。



『さといも』里親認定証

棚田　マイ　様

あなたは恵那市坂折棚田の『さといも』の里親になられたことを認めます。

平成 21 年 5月 10日

NPO法人恵那市坂折棚田保存会

理事長　田口

1，000基の灯しび田の神まつりとサミット記念コンサート

６月２０日（土）午後６時３０分から坂折棚田広場において全国棚田（千米田）サミット記念コンサートを開催した。当地での棚田サミットは、平成１５年（第９回）に実施されており、今回は第６回目の記念コンサートです。

先ずコンサートの開演は、和太鼓の世界的奏者、恵那市出身の加藤拓三さんの勇壮な太鼓の響きから幕をあげた。午後７時にはカンテラに一斉に点火、畔に灯された火が揺らぎながら棚田の水面を照らし、見事な景観であった。ついで白川町出身のフルーティオの皆さんによるオカリナ、ピアノ、フルートの演奏があり、途中鈴村八枝子さんの民話があって、コンサートを盛り上げていただけました。参加人員は、写真家の方々を含めて約３００人でした。

今後も灯し火を工夫し、より美しい祭りにしたいと考えています。

（phot by 伊藤憲男）

山の環境を考える「杣組」の立ち上げ

棚田と森林の関係は、密接である。棚田での稲作をしながら山林での仕事で生計を立てて来たことや、山草（シバ）を肥料として利用して来たりと、水源としての山林など、棚田の保全を考えると、現在の山林の在り方を見直す必要があると考えます。

この中野方町でも手入れされている人工林は殆ど無いに等しく、また「杣サ」といわれる山仕事のプロは無くなりつつある。今、私たちが出来ることは、現実に気付き、一人でも多くチェーンソーが使える「杣サ」を育成していくことだと考えられ、素人山主さんと森林ボランティアで、『子供や孫の代まで安心して暮らせる郷土に！』を目指して森林の再生に取り組んでいこうという目的で、この度「杣組」の立ち上げが行われました。当保存会の活動の一部として活躍が期待されるところです。

「くろくわ」の新酒ができました。

昨年収穫した坂折米「ミネアサヒ」と寒の内の坂折川の水で醸造した酒「くろくわ」がこのほど出来上がり、販売されています。「くろくわ」が誕生して、３年目を迎え、酒の美味しさに磨きがかかり、大変人気を集めています。最寄りの酒店で買い求め下さい。価格は１本７２０ｍｌ箱入りで１，６００円です。なお会員の方は１００円引きになります。

**********平成２１年度NPO法人坂折棚田保存会総会のお知らせ **********

日　時：平成２１年７月２５日（土）午後７時３０分

ところ：中野方コミュニティセンター会議室

あとがき

ＮＰＯの承認をいただいて、はや８ヶ月、一歩ずつではありますが、確実に歩みを進めております。さかおりお茶番処の奥に事務室を設置し、パソコン、コピー機などの事務機器も整ってきました。今号は、さかおりお茶番処で作られた初めての棚田通信です。お読みいただいた感想、ご意見などお聞かせいただければ幸いです。お茶番処に訪問の方にお茶の接待をしています。お気軽にお立寄りください。また、mail での連絡も大歓迎です。

ＮＰＯ法人恵那市坂折棚田保存会　電話:0573－23－2032　FAX:0573-23-2046　携帯:080-1553-0315
E-mail: sakaori-tanada@ia1.itkeeper.ne.jp